

ON THE SPOT

現場から

●スポーツNPO

NPOとまちづくり

全国各地で着実にその数を増やしているスポーツNPO団体同士が、互いの活動に必要な情報提供や、ネットワークづくりの場として、2000年の神戸開催からスタートしたスポーツNPOサミット。回を重ね、このような形での開催は今回でひと区切りとなる「第5回スポーツNPOサミット東京」（主催／笹川スポーツ財団、スポーツNPO活動推進ネットワーク＝NPO法人クラブネット、NPO法人神戸アスリートクラブ、NPO法人MIPスポーツプロジェクト、NPO法人阿見アスリートクラブ、NPO法人Japan Sports Revolution）が、2005年11月19日に日本財団ビル（東京都港区）にて開催された。

テーマを「スポーツNPOとまちづくり」と掲げて行われた今回のサミットは、渡辺豊博氏（NPO法人グラウンドワーク三島事務局長）による基調講演、田中弥生氏（東京大学助教授）、尻無浜啓造氏（レッド

スターベースボールクラブGM兼総監督）から最新情報の紹介、さらにテーマを3つに分けての分科会、参加者全員による会の総括と今後の展開を示唆する全体会が行われた。

「NPOとまちづくり」と題した基調講演では、環境悪化が進行した三島市の水辺環境の再生と改善を目的に活動したNPO法人グラウンドワークの活動事例が渡辺氏から紹介された。

ゴミが増え、汚染された三島市内の川をそのままにしておくのではなく、市民の手で再び川を美しくしようという目標を掲げ、地域総参加＝グラウンドワークによる町の再生に着手した。「町を元気にしたい、町づくりとは楽しいものなんだという考えに基づき、活動できるのがNPOの特権であり役割なのではないか」と話した渡辺氏。まず明確な目標を立て、何を夢に持つのかを示したうえで、多様な分野で実績を残していくことがNPOの評価にもつながることを示唆した。

続いて「最新の話題」として、田中氏からは公益法人制度改革の矛盾する課題について、尻無浜氏からは阪神タイガースの赤星憲弘選手が代表を務めるレッドスターベースボールクラブの活動意義、実際の内容などが述べられた。

午後にはそれぞれテーマごとに3つの分科会が開催

された。

分科会Aは「健康づくりはまちづくり」と題し、藤川雅仁（NPO法人徳島みらいネットワーク理事長）、石井麻知子（NPO法人結いの会）、三木孝（神戸市企画庁政局調査室主事）の3氏がパネリストを務め、各NPO法人が実際にどのような方法で「まちづくり」に携わっているのかがそれぞれ述べられた。

「総合型地域スポーツクラブは“公共サービス”の担い手となりうるか」と題して行われた分科会Bは、宮城島清也（NPO法人清水サッカー協会理事）、山中昌彦（渋谷区教育委員会）の両氏がシンポジストを務め、NPO法人として活動する立場から、さらに行政としての立場からの意見が述べられ、会場からの意見を積極的に取り入れながら進められた。

分科会C「行政、企業との連携によるスポーツNPOの事業展開の可能性～指定管理者制度とNPO～」では、銭形太郎氏（(株)三菱総合研究所）がパブリックビジネスと指定管理者制度について、久代雅之氏（横浜市教育委員会）が横浜市スポーツ施設における事例を、菊池広人氏（NPO法人MIPスポーツ・プロジェクト）が同法人における指定管理者制度への取り組みをそれぞれ紹介した。管理実績がないこと、母体が小さいことなどがスポーツNPOにとって不利となる点ではあるが、地域に根づいた活動から得た新しいノウハウを提案していくことの重要性が確認された。

それぞれ活発した議論が展開された分科会を終え、最後には「全体会」



「まちづくり」を題材に基調講演を行う渡辺氏

として、参加者全員による第5回スポーツNPOサミット東京の総括や、今後の展開についての展望を語り合う場が設けられ、基調講演を行った渡辺氏から「NPOが活動、活躍する足場はできており、ネットワークが始まったという確かな一歩を記し始めた。基盤ができたからこそ、思いついたらすぐに始める行動力が求められていくのではないかと述べられた。

今後はスポーツNPO活動推進ネットワークの情報交換の場となるホームページ (<http://www.atacknet.co.jp/sportsnpo/>) が開設されることも発表され、今回までのような「サミット」の形ではなく、新たな連携による幅広い活動が展開されていくことが期待される。第5回スポーツNPOサミット東京の正式な内容については、後日発行される報告書をご参照いただきたい。

●体育学

日本体育学会 第56回大会開催

「21世紀の体育学を考える～身体とスポーツの資源としての価値を問う～」を大会テーマとした日本体育学会第56回大会（主催／(社)日本体育学会）が、2005年11月23～26日、筑波大学（茨城県つくば市）にて開催された。日本体育学会本部企画として2つのシンポジウム、6つのオーガナイズドセッション、組織委員会企画として3つの記念講演、3つのシンポジウム、大学院セミナー、企業セミナーのほか、専門分科会企画、一般研究として13の分野でそれぞれ研究の成果が発表された。

そのなかからここでは、文部科学省との共催で行われた岩本渉氏（ユネスコ教育局中等・職業技術教育部

長）の記念講演「国連スポーツと体育の国際年制定の経過と日本の役割」について紹介する。

スポーツと体育の国際年が2005年に制定されたのは、99年にウругアイで開催されたユネスコ主催のMINEPS（体育・スポーツ担当大臣等国際会議）にて、体育教育が学校教育の中で周辺化している点が指摘されたことに始まっている。その後、03年1月にパリで行われた体育・スポーツ担当大臣円卓会議にて、スポーツ・体育が社会的統合や文化間の対話に役に立っていること、協力、チームワークを考えるよい機会を与えていることが確認されたことなどを受けて、同年11月の第52回国連総会で2005年を「スポーツと体育の国際年」に決定した。

その決定をもとに、国連本部では05年にチュニジア、ロシア、タイで国際シンポジウムを開催し、スポーツの持つ倫理的意味、健康、福利厚生における重要性、民族間の紛争予防のためにスポーツがどう貢献できるかについて討議し、11月に行われたタイのシンポジウムでは、スポーツが教育の質の根幹に当たる部分であることが宣言された。また、国際年における他の活動として、ルーマニアでは、少数民族などで「女性に教育は必要ない」という親の考えから女子学生の学校からの脱落がみられるが、著名なスポーツ選手を招いてスポーツの楽しさを教え、学校への定着を目指していることが紹介された。WHO（世界保健機関）では健康の側面から肥満などへの対策として、UNAIDS（国連合同エイズ計画）ではHIVの予防の観点で、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）では難民の社会復帰などにスポーツが活用されており、ユネスコでも5月にアフリカのベナンでアフリカ30カ

国を集めて教育・スポーツの質に関するシンポジウムを行い、教員養成の問題について討議している。

岩本氏によると、ユネスコは05年10月にドーピングに関する国際条約を制定しているが、「勝利を目指すことはすばらしいが、勝つために手段を選ばないのは人間として最低ではないか」という議論が熱心にされたそうだ。スポーツは敵（相手）と同じルールのなかで戦うものであり、相手を尊重する精神がないと成り立たない。この「相手を尊重する精神」を教えることのできる分野が体育であることを岩本氏は示唆し、世界規模でみると貧困や紛争のない日本が恵まれた国であると述べたうえで、「体育が学校教育のなかで重要な科目であり、社会における活動としても重要な領域であることを再認識してほしい」と話した。

健康づくりや体力向上の面だけでなく、幅広い視野からのアプローチが21世紀の体育学には求められていると言えそうだ。

●スポーツ栄養

第11回スポーツ栄養 セミナー

2005年11月23日、東京農業大学（東京都世田谷区）にて「第11回スポーツ栄養セミナー」がSNA（スポーツ栄養学研究会）主催、SSO（スポーツサポート機構）協力のもとで開催された。東京農業大学教授・川野因氏による特別講演「スポーツ選手を支えるEBN——鉄欠乏性貧血予防の観点から」に始まり、パネルディスカッションでは「栄養士・管理栄養士に一言！——選手が望む食事・食教育」をテーマとして、津田清美氏（アイシン・エイ・ダブリュ（株）トレーナー）、成國晶子氏（AACCゴ

ON THE SPOT

ールドキッズレスリングクラブコーチ)、乙坂紀子氏(株)横浜ベイスターズ・チーム運営部育成担当、管理栄養士)の3氏より話題が提供された。その後、約1時間にわたって、ラウンドテーブルディスカッションが行われた。

川野氏の講演タイトルにあるEBNとは「Evidence-Based Nutrition」の略であり、「科学的根拠に基づいた栄養学」を意味する。「貧血が明らかとなった場合には、赤血球の合成と分解のバランスが損なわれた主要原因を洗い出し、これに対する方策をたてて治療することが必要。この考え方こそ、科学的根拠に基づいた栄養サポートである」とした。

パネルディスカッションでは、津田氏が女子バスケットボール選手のトレーナーとして栄養士とともにサポートした経験から、「選手自身の食に対する興味や意識が高まらなければ、指導は一方通行に陥りやすい。選手が満足する食事を提供するために、栄養士は大いにスポーツ現場に出向いてほしい。選手やスタッフと接するうちに現場の要望がみえる」とした。現役選手でもある成國氏は子どもたちへのレスリング指導を通じて「レスリングには厳しい体重管理が付きもの。そのためにはジュニ

ア期から正しい食事の知識が必要。母親としても、毎日の食事づくりに活かしていける、わかりやすい栄養管理、おいしい食事をつくる方法を教えてほしい」とした。最後に乙坂氏はプロ野球選手の寮における食堂での環境づくりの経緯を紹介し、「選手個人の食意識を向上させるには時間がかかる。しかし、監督やコーチをはじめ、スタッフ全員が連携すれば、全体で選手の食事に気を配ることができる」と述べた。

その後のラウンドテーブルディスカッションではSNAスタッフ進行のもと約120名の参加者が10グループに分かれ討論を行った。その結果「栄養教育は指導効果を測ることが難しい」、「他スタッフとの連携をとるためにもいろいろな知識が必要」、「ジュニア期からの食育が大切」などの意見が出された。

スポーツ現場で働く栄養士の数は、病院などで働く栄養士数に比べれば、まだ少ない。雇用が少ない背景にはチームの経済的な事情もあるだろうが、スポーツ現場での栄養士の役割や存在価値が明確でないことも考えられる。最後のディスカッションで「スポーツ栄養の現場をボランティアからビジネスに変える必要がある」という意見も挙がった。雇用数

の増加は栄養士がスポーツ現場に、より積極的に介入できることにもつながるだろう。そのためにも、現在行われている栄養サポートの方法やその効果を多くの人が共有できる形に整理し(結果評価および影響評価)、成功例だけでなく失敗例も含めて正しく紹介・報告する必要があるだろ

う。

(報告者/目加田優子、片桐俊之・SNA)

●スポーツ記念事業

“本物”から学ぶ

「陸上王国・兵庫」を支え、数々の名勝負・歴史を生み出してきたユニバー記念競技場(神戸市須磨区)の開設20周年を記念し、青少年への陸上競技普及と競技力向上を目指し、また震災10年を経過した神戸でスポーツを通してその復興とこれからの成長を発信することを目的に、2005年11月13日に「トラック&フィールドドリームデー」と題したイベントが開催された。

午前中は小学4~6年生を、午後は中学生を対象とした陸上クリニックが行われ、午前午後あわせて900名が参加する盛況ぶりとなった。当日は、朝原宣治選手、小島茂之選手、小島初佳選手、為末大選手、花岡麻帆選手という日本を代表するトップアスリートや、大学の陸上競技部監督などで結成された「アスレチックチーム昭和30年会」のトップコーチが講師役として直接指導にあたった。

まず午前の部では「トラック&フィールドサーキット」と銘打ち、「走る・跳ぶ・投げる」と3グループに分かれ、トップアスリートたちの動きをみながら実技を行う。簡単そうにみえても、やってみると意外にできないドリル練習などですべての運動の基本となる技術の習得に励む姿がみられた。

午後の部は「経験者を対象としたトラック&フィールドクリニック」とし、短距離、ハードル、長距離、跳躍、投てきの5種目に分かれ、より専門的なトレーニングが行われた。1人1人の動きをみて、講師の選手



川野氏の講演を熱心に聞く参加者の姿がみられたスポーツ栄養セミナー

やコーチ陣から直接声をかけてもらい、細かなアドバイスが送られる。指導されることに対して真剣に取り組む参加者の顔つきから、普段の練習から真剣に打ち込んでいる様子は想像できたが、さらにこのような機会を得て、自分のフォームについて声をかけてもらった後の和らいだ嬉しそうな笑顔が印象的であった。

指導終了後には為末選手、谷川選手が競技で使用されているハードルを実際に跳んでみせる場面もあり、「本物」の技に改めて参加者たちは目を見張り、大きな拍手を送った。普段はテレビや雑誌を通してみることでしかできないトップアスリートや、トップコーチから直接指導が受けられるとあって、参加者たちは終始熱心に聞き入り、2時間という短い時間とはいえ、とても充実したものになったようであった。
(報告者／宮本宏史・NPO法人神戸アスリートタウンクラブ)

●水中運動

あるべきプールの姿とは？

子どもから高齢者まで、広い世代が実施することが可能である水中運動。それぞれの目的に応じ、どのようなプールが求められ、どんなプールが必要なのか。そして、そのプールを運営していくために必要なことは何か。そんな疑問を解決するための場として、2005年12月2日にヤマハスポーツ文化フォーラム2005(主催／ヤマハ発動機(株))が、ヤクルトホール(東京都港区)にて、「あるべきプール、ありたいプール」と題し開催された。

まず初めに、坂田公一氏((財)日本体育施設協会専門委員)から「指定管理者として認識すべき重点課

題」と題した基調講演が行われた。坂田氏は「なぜ(プール運営に)指定管理者制度を導入しなければならなかったか」といった点に触れ、主な公共体育施設の収支状況を提示した。それらの施設で収支が拮抗している

場所はほとんどないという現状から「人間の能力を活用して、住民へのサービス向上を図るということが、指定管理者制度導入の大きなねらい」と坂田氏は述べた。

しかし実際には、「何をどうできるのか」といった具体策が明確でないケースや、これまで行政で実施されてきたサービスをいかに上回ることができるのかという、一種の“得意分野”が示されていないことが多くあるのだと言う。全国で、指定管理者制度による運営が行われている施設例や、ワンストップサービスの恒久的実現など、まず認知すべき課題を示し「運営面をより充実したものにしていくためには、競技会や水中運動などのほかにも、幅広いイベントの実施などの概念も必要になってくるのではないかと進言した。

続いて講演した関根智氏((財)日本体育施設協会施設設計監理部会)は「事業プロセスにおける設計者の関わり」と題し、設計者の立場から事業者の課題と、設計者への期待を述べた。業務を拡大し、サービスを向上させるためにどんな物件を発注し、管理・運営していくべきか、技術的視点を踏まえた市場ニーズを調査することや、「ホームページなどを利用して、戦略的運営と利便的な運営を行ってほしい」と話した。



実際に為末選手からドリルを教えてもらうことができた、神戸でのトラック&フィールドドリームデー

最後に行われたシンポジウムは、フォーラムのメインテーマである「あるべきプール、ありたいプール」を表題に、宮下充正(放送大学教授)、佐野和夫((財)日本水泳連盟専務理事)、石津政雄(日本大学大学院客員教授)、矢倉裕(ヤマハ発動機(株)プール事業部事業部長)の4氏がパネリストを務めた。

最初に宮下氏から、フランスやドイツ、アメリカなど世界各国のプールが紹介され、それぞれが独自の目的や工夫のもとでつくられていることが述べられた。日本の辰巳国際水泳場や筑波大学、鹿屋体育大学のプールの構造工夫や目的についても触れ、「世界は、誰でもつくれるプールをつくらうという流れになっている。そのためにどのようなプールをつくるべきかを考えることがまず求められている」と述べた。

続いて佐野氏は、水泳連盟で強化や競技力向上に携わる立場から、「水深とスタート台の高さに関するガイドラインを作成した」と話した。全国の既存プールには、水深1~1.2m程度の施設がかなり多いなか、競技会やトレーニングを実施していかざるを得ない。そこで「飛び込み事故の防止を図り、より安全で合理的な水泳の普及・振興に結びつけるために(ガイドラインを)作成した」と

ON THE SPOT

述べた。

前大洋村村長として行政の立場から、地元住民の健康増進事業の一環として水中運動を実施してきた石津氏は、主に高齢者を対象としたアクアエクササイズ例など、健康面を第一として考えた場合に求められるプールについて述べた。

このように、競技と安全性の問題、高齢者も子どももアスリートも「誰もが」使えるプールづくりの実現に向け、全国各地に設立されているさまざまなプールの例が最後に矢倉氏より挙げられた。

フォーラムに来場した鈴木大地氏（ソウルオリンピック100m背泳ぎ金メダリスト、順天堂大学講師）から、大学近くにある多大な資金を費やしてつくられたプールが、冬場は運営されていないことが挙げられ、「いかにお金のかからないプールをつくることができるか、いろいろな立場から運営を考えていくことが今後は必要なのではないかと印象を述べ、会が締めくくられた。

健全でたくましい子どもの育成と、自活できる高齢者の養成、そしてアスリートの競技力向上。すべての目的を満たすのは容易ではないが、あるべきプールが今後も増えることを願う。

●トレーナー

学校へのトレーナー派遣で生じた意識の変化

運動部活動に携わる誰もが、ケガを気にすることなく安全に行うために、今年度から神奈川県では神奈川県教育委員会教育局保健体育課と、神奈川県体育協会の連携で、県立高校10校にトレーナーを派遣している（詳細は本誌8月号参照）。神奈川県体育協会トレーナー部会からの

推薦を受けて派遣されたトレーナーの、神奈川県麻溝台高校での活動事例をここでは取り上げて紹介する。

神奈川県相模原市にある麻溝台高校は、陸上競技部やバトン部などを中心に生徒の多く

が何かしらの部活動に参加している（参加率は約7割、県内でも上位3校に入る）。しかし部によっては、専門的な指導者がいない部もあり、満足な環境で活動ができているとは言いがたい。そこで、より安全に、よりよい環境で生徒たちが部活動を行うために今季からトレーナー派遣の受け入れを開始した。

同校に派遣されているのは、日本体育大学アメリカンフットボール部トレーナー、新横浜整骨院で院長を務める青柳康史氏。毎週水曜日には教室の一室を「トレーナーズルーム」とし、ケガをしている選手や、気になる箇所のある選手たちの相談や指導にあたっている。

積極的にトレーナーズルームを活用している生徒たちに対しては、実際にアドバイスなどを行うことも容易なのだが、直接話を聞くことのできる数には限りもある。そこで、トレーナーズルームには、それぞれが聞いてみたいこと、気になることを記入する「Q & A」や、既往歴を書き込む専用の用紙を設置し、書かれた質問すべてに、青柳氏が細かく答えを書き込む。自身のトレーナー活動に役立てるだけでなく、生徒たちから挙げた質問や意見などは、「ケガ」、「技術」などそれぞれ項目ごとに整理をして、各部の顧問へとフィードバックされている。



青柳氏の指導のもと、麻溝台高校の生徒たちは正しいストレッチの方法を学ぶ

「生徒によって（質問や要望は）異なりますが、トレーニングやケアの方法などについての質問がとても多い」と言う青柳氏。トレーナーズルームでの活動だけでなく、去る12月14日には同校の総合的な学習の時間の一環として、授業の1コマを使って、2年生約50名を対象にした「ストレッチ講座」を実施した。まず「なぜストレッチを行う必要があるのか」といった定義から説明し、ウォームアップで行うストレッチを順序よく行っていく。学校側にとっても「顧問教諭だけではカバーできない部分を、こうして専門の方に教えてもらうことができ、生徒たちのケガに対する意識も高まるなど、少しずつ変化してきたと思う」とトレーナー派遣で得られる成果を述べる。

安全対策という大きなテーマに基づき、全国でもあまり例のない「県立高校へのトレーナー派遣事業」は来年以降も継続されていく予定だそう。学校側にとってはより安全な環境での運動部活動の実施、生徒1人1人の意識向上、トレーナーにとっては学校という現場で何が起きていて、何が必要とされているのかという生の声を聞き、活かすことができる両者にとって有用な試み。来年度以降の取り組みももちろんだが、同様の試みが全国各地で実施されていくことも併せ注目していきたい。